

虚大古墳の時代

平松幸一

日本史には古墳時代という不思議な時代区分がある。そこでは、巨大な前方後円墳の出現を大きな政治勢力の存在の証とし、それを実際には七～八世紀に成立した日本国の近畿大和朝廷「先在」に結び付けている。それが、大きな誤解に基づく憶測と迷信に過ぎないことをお示ししたい。

代表例として、笹山晴生氏の『日本古代史講義』¹を取り上げ、その中で、古墳に関する事実と推測がどのように説明されているか、引用してみよう。(以下引用文は一字右寄せ)

古墳は高塚墳墓という墳墓の一形式であり、中国では戦国時代から王侯の墳墓として出現し、秦・漢時代には一般化して、巨大な墳丘を形成するものに発展した。朝鮮では中国の影響を受けて楽浪郡を中心に築造が行われ、おくれて高句麗や朝鮮南部にも夫々特色ある墳墓が発達した。わが国の古墳は、三世紀後半以後、瀬戸内海沿岸から畿内にかけての西日本に、前方後円墳という独特な形式をもつものとして出現したのである。

古墳は個人を埋葬するための墳墓であって、弥生時代に一般的であった共同墓地とはその性格を異にするものである。

(中略) 四世紀代のいわゆる前期古墳は、そのほとんどが前方後円墳で、長径一〇〇メートルをこえる大規模な墳丘をもつものであった。それは主に自然の地形を利用して掘削・盛土したもので、その多くは丘陵の尾根端、あるいは丘頂に位置しており、**墳丘の大半を人工の盛土によった五世紀の中期古墳**とは異なっている。

とある。

しかしここで、五世紀中期古墳の墳丘の大半が人工の盛土によって造られたという誤解が、なぜ生まれたのか、また、膨大な労働力を組織的に駆使することもできず、すぐれた測量技術や土木工学的知識、大量の土木用の鉄器の集積が有ったとも云えない近畿地方に、巨大古墳がどうして出来たのか、出発点に戻って考えなければならない。

古墳について考えるための基礎的な資料の一つに、**宮内庁書陵部紀要**がある。『陵墓関係論文集』²にまとめられ、公刊されている。

その**巻頭論文**が梅原末治氏の『**応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と营造**』(昭和30年3月所収B5サイズ15ページ)だ。古墳を論ずる多くの著書が土量計算の基礎資料として引用している。

始めから**(実証されていない)**天皇名を冠していることにまず驚かされるが、その記述のポイントを引用してみよう。

その規模がすべて大きい我が上代の天皇陵のうちにあっても、**応神・仁徳・履中三代の御陵は殊に目立って大きくて、まことに山陵と呼ばれるにふさはしい。中でも仁徳天皇陵はその平面形の上で、有名な埃及ギゼの第一ピラミッドなり、中国での秦の始皇陵を凌駕すること、今や一般の常識となつてゐる。・・・**

日本考古学協会の古墳委員会で・・・宮内庁書陵部提供の実測図に基づき容積の検出調査を、一九四九年度からおこない、二年間でほぼ満足すべき結果を得ることが出来た。かくて平面形の上では仁徳天皇陵の最も大きいことに変りはないが、陵そのものの容積に於いては**応神天皇陵が首位を占める事実が確かめられることになったのである。**

二年もかけて計算した地平面上の丘陵の容積は、

仁徳天皇陵	百四十万六千立方米
応神天皇陵	百四十三万四千立方米
履中天皇陵	六十一万立方米

とあり、得られた成果は応神天皇陵のほうが（少々）大きかったというだけの事だ。

丘陵の成因についての調査や検討はまったくなされないまま、続けて、これだけの容積を丸々客土で築造するという非現実的な仮定のもとに、以下の考察が記述されている。

まず仁徳陵について、

仮に一立方メートルの土量の運搬距離を平均二百五十メートルと見て、それを一日一人とすると、全土量に要する人員は凡そ百四十万六千人に近いものとなる。従って一日に一千人を使うても四年に近い年月が土量の運搬だけにかかるわけで、実際の上ではそれを整美な形に仕上げなければならず、更に大規模な中堤以下の土工が加はっているので、一層夥しい人員と時日を要したこと疑いを容れないわけである。

以下同様の考察を応神・履中陵について述べた後、

最後に西暦四世紀末から五世紀の前半に互る是等三代の天皇陵、殊に**応神・仁徳両天皇陵の示す規模**は、当時の我が**統一国家の強大を最も端的に示すもの**に外ならないが、・・・・古墳の営造に費やされた労力や実に膨大なものであった。・・・・その営造に要した歳月の長いことが考へられて、生前からの営造（寿陵）たることの確かさが認められることである。

と短絡的に結んでいる。

いろいろな人が引用している、某土建会社の試算（1985年）では、同じ土量に対して、

『この仁徳陵を古代の工法で造営するとすれば、一日当たりピーク時で二千人、延べ六八〇万七千人を動員して十五年八ヶ月の工期と七九六億円の工費を要する』とあり、**梅原推算の四～五倍**に膨らんでいる。

これは、梅原氏の言うこの**古墳の営造が事実上不可能だ**、と宣言しているに等しい。

それにも拘らず、私が眼を通した数十冊の古墳に関する書物のほとんど全部が、この梅原論文の結論を疑うことなく、そのまま直接あるいは間接的に取り入れ、またその論旨の示す路線に沿って更に空虚な詳論を進めている。

どうやら**巨大前方後円墳についての国民的迷信の淵源**はこの宮内庁発行陵墓関係資料集の巻頭論文にあり、そして考古学者や歴史学者その他の盲目的なレピーターが迷信に拍車をかけているようである。

では、具体的な実態を示す、より現実的な研究論文はないのか？

実は、同じ書陵部編の『陵墓関係論文集<続>』³に、地質学者**梅田甲子郎**の『**応神天皇陵付近の地質と地形について**』（昭和58年2月所収B5サイズ6ページ）という報告書がある。**陵墓の築造方法について梅原常識とは異なる見解**を示しているのです、その要点をご紹介しますよう。

南河内の羽曳野市誉田と藤井寺市道明寺にまたがる**応神天皇陵**（図4）付近には、大小さまざまな古墳が密集していて、なぜこの地域に古墳が多いのか、どのようにして築造されたかの議論が盛んである。筆者はもともと、崇神天皇陵、景行天皇陵および仁徳天皇陵などのような巨大な前方後円墳は、周辺の地質と地形からみて、**平坦地に新しく築造されたものではなくて、既存の天然の小丘を十二分に利用して、それを前方後円状に整形したもの**と推定しているが、当地方の**応神天皇陵をはじめその他の古墳も例外ではない**と考えている。・・・・

生駒金剛山脈付近は南北方向の断層運動が優勢であって、主峰の生駒金剛山脈以外にも断層運動によって生じた南北方向の丘陵が多い。その一つである**羽曳野丘陵**は生駒金剛山脈のすぐ西側を平行に走る台湾のような形をした丘陵である。丘陵を構成している大阪層群は丘陵全域にわたってほぼ一定の北五十ないし六十度東の走行を示す。・・・・

応神天皇陵付近の**大阪層群**は段丘堆積物・沖積土に被われて、余り地表に露出していないが、**陵墓のいわゆる地山などに現れている**。……

応神天皇陵付近の大阪層群は**南北方向の断層運動によって隆起した羽曳野丘陵の大阪層群の北方延長であるとするのが妥当である**。……

以上の地質構造より、当地方はもともと羽曳野丘陵の北部であったが、その後かなりの浸食を受けたものと考えられる。しかし、その**丘陵頂部付近は侵食し尽されずに残丘の列となった**。原野に散在するこれらの残丘群は陵墓とするのに適当な大きさであったため、前方後円状に加工整形して陵墓としたものであろう。なお、これらの陵墓は、規模に差があるのみならず、形態にも違いがあり、向きもまちまちであることは、築造に際して出来るだけ**残丘の原形を利用して労力の節約をはかった**ことを物語るものではないであろうか。

大和の山の辺の道の崇神天皇陵・景行天皇陵付近や明日香村周辺などでは、墳丘以外にも似たような大きさの未利用の残丘が処々で散見され、陵墓はこのような残丘を利用したものであろうと自ずから察し得る。

ところが**応神天皇陵付近では墳丘以外に残丘が見当たらないため、陵墓はすべて平坦地に新しく築造されたかに見える**ので、地質構造から考え得る一つの見方をここに示した。

言われてみればごく当たり前のことである。専門家でない一般の常識人にも素直に理解できる内容だ。

古代人の現場感覚に即した、古墳築造の基本原則が明快に示されている、とも云えるだろう。特段の技術力、動員力のない土着の豪族でも、十二分に体面を保てる墳墓が自前で持て、何の不思議もない。

この梅田論文に示された基本的な考え方は、その後の、古地震研究会による継続的な研究によっても裏付けられている。

『続古地震』⁴第6章「天平6年(七三四)の畿内地震—誉田断層の最新の活動はいつか」(A5サイズ36ページ)によれば、

誉田陵の前方部西側が崩落し、中堤部も切れて東上がりの変位が生じたのは、

続日本紀のこの年4月の記事

「(七日)地大震、壊天下百姓廬舎、圧死者多、山崩川壅、地往々圻裂、不可勝数」

「(十二日)遣使畿内七道諸国、遣看被地震神社」

「(十七日)詔曰、今月七日地震殊常、恐動山陵、亘遣諸王真人、副土師宿祢(技術者)一人、遣看諱所八處(7ページ末追記参照)及有功王之墓、……」

が示す大地震(計算マグニチュード七.一)の時であった、と推定している。

これは、誉田断層を含む生駒活断層系の活動によるもので、この時の**誉田断層の上下方向の変位量は一、八メートルと計測されている**。地震の発生間隔は五〇〇〇~七五〇〇年だそうである。

この研究報告の中では梅田論文の内容検討も織り込まれ、部分的な修正意見が加えられているが、基本的な考え方はそのまま容認され、地質学者間の共通認識となっているようだ。

この研究結果から試算してみると、**誉田(応神)陵の標高差三十六メートルが形成されるためには、単純計算で二十回の断層活動、十ないし十五万年かかった**という勘定になる。地質学的には第四期(この二百万年程)末、きわめて最近のこの地域における地殻変動の一つの表れと考えて矛盾はない。

梅田論文の中で使われている用語「大阪層群」とは、海進海退を繰り返した古大阪湾に何段にも堆積した粘土層を含む、大阪盆地を構成する地層の総称で、この地域の地殻変動の歴史を物語る指標になっている。

山陵の地山でこの層が識別できるということはこの地山が人工の盛土ではあり得ないことを証明するものである

この梅田氏の見解を自分で確かめたい方は、国土地理院から発行された二万五千分の一都市圏活断層図（京都西南部、奈良、桜井、大阪東南部、大阪西南部）をご覧ください。活断層に沿って古墳群が密集していることが、一目瞭然で判ります。

大仙（仁徳）陵の**実築造年代**について：

坂本太郎氏はその著書『日本古代史の基礎的研究』⁵冒頭の一節において

・・・四世紀後半から五世紀初頭にかけての時代は、わが皇室の系譜によると**応神天皇・仁徳天皇の時代にあたる**と見て良い。そして両天皇の山陵の規模が歴代山陵中最も大きく、類を絶っていることはあまねく世に知られたことである。この巨大な山陵を築造できたことから、時の**皇室の権威の高さと国力の強さ**を推察することができる。日本における国家統一のエネルギーはよほど強大なものであったに違いなく、そのエネルギーは統一直後の半世紀ぐらいの間に最高度に増大したものである・・・

と述べている。

日本歴史学会の最高権威者の一人坂本氏の説である。**個人的な見解**であり、**検証もされていない**が、学会の暗黙の規準になっているのであろう。日本の国史教科書は、このニュアンスで叙述されている。

ところが、張龍鶴氏の『虚構の国日本』⁶には、

・・・武寧王陵発見で注目されるのは、副葬品として出土した三つの銅鏡のうち、二つの獣帯鏡の文様が、仁徳陵から出土した獣帯鏡のそれと同一であり、銅質もまったく同じものだということである。したがって、**仁徳陵の築造年代は、5世紀前半ではなく、6世紀前半**としなければならず、日本古代史の編年が根本から崩れ去ったことになる。仁徳陵の**被葬者が誰であったのかは特定できない**としても、その**副葬品から見て、朝鮮的性格を持つ人物であったこと**だけは間違いあるまい。

仁徳陵から出土した獣帯鏡は現在、アメリカのボストン博物館に所蔵されており、1972年には東京国立博物館で展示された。それまで不可侵とされた天皇陵の副葬品が日の目を見たのは、1872年（明治5年）の台風によって古墳の土が崩れ、石棺が露出したためで、その時盗まれた副葬品の一部が、太平洋を越えて流出した・・・とあり、この方が実年代を示していることは明らかであろう。

参照資料：

1. 笹山晴生著 日本古代史講義 1977/3 東京大学出版会
2. 宮内庁書陵部陵墓課編 陵墓関係論文集 1980/4 学生社
3. 宮内庁書陵部陵墓課編 陵墓関係論文集<続> 1988/8 学生社
4. 萩原尊禮編著 続古地震 1989/3 東京大学出版会
5. 坂本太郎著 日本古代史の基礎的研究 1964/5 東京大学出版会
6. 張龍鶴著 朴飛雲訳 虚構の国日本 1987/9 現代出版